

指導動画で収束後備え

新型コロナで弘大COI 健診の在り方模索

健康寿命延伸を目指し多くの企業や大学などが参画する弘前大学COI(中路重之拠点長)が、普及を目指す「啓発型健診(QOL健診)」について、新しい生活様式にも合った「3密」を回避した方法による健診の在り方を模索していることが26日、分かった。国の緊急事態宣言は解除されたものの、新型コロナウイルスによる今年度事業への影響が免れない状況の中、担当者は「こういう時だからこそ新型コロナ収束後に備えた取り組みを展開し、基盤整備に注力していきたい」と強調。県内各地で活動する健康リーダー向けの指導用動画も作成し、コロナ禍収束後に備える考えた。(成田真由美)

【関連記事2/6、11面】

弘大COIによる啓発型健診の海外普及と、今年度は、200を狙いベトナムから健康指導者を招聘する5年度から毎年行っている1000人規模の岩木健康増進プロジェクト(岩木健診)の延期を余儀なくされた。県内普及を狙い、5000人を対象に実施予定だった啓発型健診も延期や中止が相次ぐ。



弘大COIは新しい健診の形を検討するなどしてコロナ禍を乗り越える手だてを講じていく(写真は2018年の啓発型健診の様子)

さき健康増進リーダーや県内の地域、職場、学校の健康リーダーとして活躍する「健やか隊員」のスキルアップに向けた取り組みだ。住民の健康づくりを支える指導者向けの動画を作り、一部はネットで配信することも検討している。普及を目指す啓発型健診の仕組みや目的、測定方法などについて分かりやすく紹介する内容を目指しているという。

弘大COI担当者は「各地に広まっている健康リーダーを通じて、コロナ禍収束後に健康づくりを一気に広めたい」と狙いを語る。

今年度の目玉事業の一つに据えていた、5000人を目標とした啓発型健診については、「3密」を回避した方法での実施を検討している。対象人数が減るのはやむを得ない状況だが、新しい生活様式、仕事スタイルにも合ったような、コロナ禍の中での健診の在り方を研究で「3密」を回避し、測定できる項目に限定するなど工夫した方法を考えた。効率を下がるかもしれないが、県民の皆さんの健康づくりには貢献できるのでは」と担当者と強調する。

弘大COIは13年度に国の事業に採択され、21年度が最終年度。今年度は総仕上げに向けた重要な年となる。村下一副拠点長は「残された期間は2年だが、『ポストCOI』という次のフェーズを見据えている。岩木健診も続けていきたいと考えているし、コロナ禍の中でできることを確実に発展的にやっていきたい。今はその準備期間」と前向きに語った。

中路拠点長は「コロナ禍を契機に、健康づくりも生まれ変わるいい機会だ。新しい生活様式に合わせた岩木健診、QOL健診などの取り組みで短命県返上につなげていきたい」と力を込めた。

こうした中、コロナ禍収束後を見据えた仕掛けが動き出した。第1弾は、弘前市のひろ